

青春スクロール

母校群像記

saitama@asahi.com

先生や仲間たち 出会いを糧に多方面で活躍

熊谷女子高校（以下、熊女）の卒業生は、教育や感染症対策、建築、ファッションと様々な分野で活躍する。

県教育局副部長の石川薫（59、1981年卒）は教員の道をあきらめかけていた3年生の時、担任に「本当にいいの？ 教員もいいものだよ」と背中を押され、顧問からは「決めるのは自分自身だ」と諭された。「自分で考えて決め、逃げないことを高校で教わった」

社会が変化する中で、衣食住の基本となる家庭生活の大切さを生



校長時代はブログで生徒の活躍や学校の魅力を発信したという石川

県立熊谷女子高校③



徒に教えたいと思い、専門に家庭科を選んだ。今は「先生たちが誇りを感じ、生徒がいきいきと輝く学校づくりを支援したい」と話す。

県保健医療政策課長の縄田敬子（53、87年卒）は、個性豊かな仲間、おしゃやれな人……。同じ15歳だけで、多才で「高校ってすごいところ」と思った。宇宙研究会の合宿では、校舎の屋上に円形に布団を並べ、流星群を眺めた。

「自分が受けた教育を社会にかえさなければ」と県庁入り。命に



新型コロナウイルス対応に追われる日々を送る縄田。「ジェットコースターに乗っているよう」と表現する

関わる新型コロナウイルス感染症の対策に奔走する。どんなに忙しくても、部下の相談に時間をとるように心がける。「持てる力を絞り出し、与えられた仕事に丁寧に向き合うことが全て」と話す。

1級建築士の大石かおり（43、97年卒）は部活のハンドボールに明け暮れた。「限界を決めず、頑張った先に何かがある」と教えてくれたのが部活だった。大学卒業後、設計事務所やハウスメーカーの職場を経験。木材をなるべく加工せず無垢の状態を使う家づくりにこだわり、手触りや居心地のよ



大石の自宅は日の光がよく入る。空間に行き止まりがないように工夫している

さを追求する。

大石と同期で同じハンドボール部で汗を流した森田真紀子（43、97年卒）。2人には忘れられない友がいた。同じ部活にいた同期で、20代後半、事故で亡くなった。大石は「人間性を深く理解し合った部活の仲間たちとのつながりは宝」、森田は「優しさにあふれた親友」と言う。今も同期で集まり、お墓で手を合わせる。

設立16年を迎えるアパレルブランド「ステラシフォン」の取締役を務める森田の信念は、熊女時代から一貫し、「人とのつながりを大切にしたい」というもの。生地、仕立てや縫製は国内で行う。オリジナルのプリントや織り柄がこだわりだ。



自宅で洗えるなど手入れが簡単な服をそろえる。「年齢に関係なく、品のある服でおしゃれを楽しんでほしい」と森田